やっとかめ文化祭

歴史まち歩き

36 下街道と山田荘

【大曽根駅西駅前広場▶大曽根駅西駅前広場】

庶民の暮らしを支えた下街道と、笑い文化のふるさとを訪ねて

瀬戸街道との分岐点、下街道沿いのまち、大曽根。江戸時代には遊郭や小劇場、演芸場が立ち並び、多くの見物人で賑わっていました。この地には、尾張万歳発祥の地である長母寺があり、笑いのルーツがあります。

① 下街道の大曽根道標

延享元年（1744年）に設置されたもので、現在は大曽根商店街の東の入口に建っています。地下鉄の出入口に隠れているため、注意していないと気づきません。これは名古屋城下の北東の関門に位置していた大曽根の追分に建っていた道標で、大曽根から勝川を経て東濃から木曽の中山道に合流する下街道（善光寺街道）と、守山、瀬戸から飯田へ通じる飯田街道の分岐点を示し、「右 いゐたみち 左 江戸みち ぜんく己うじみち」と刻まれています。
下街道は名古屋から小牧、犬山方面に通じる公用の上街道（稲置街道）に対して、善光寺や御岳山参りの人たちも利用した庶民の道で、ほぼ現在の国道19号にあたります。
また、飯田街道は瀬戸街道ともよばれ、陶磁器のほか信州方面への塩や物資の輸送にも使われた道で、途中の水野を経由して尾張徳川家初代藩主の徳川義直の廟所がある定光寺へ向かう道であることから水野街道、殿様街道ともよばれました。

② 山田天満宮

学問の神様、菅原道真公を祭る神社。境内の牛は受験生の強い味方。ちなみに、名古屋には「三大天神まいり」という合格祈願があります。詳しくは、手水舎の裏をチェックしてください。徳川光友が創建しました。

③ 金神社

ここで、お金を洗うと金運アップするという「銭洗い」があります。見事に宝くじが当たったという人もいるとのこと。信じるかどうかはあなた次第…。

④ 広福禅寺（山田幼稚園内）

山田重忠という、鎌倉時代にこの地域（山田荘）を治めていた人の碑が幼稚園の中に建っています。このあと向かう長母寺を作ったのは、この山田重忠さん。この人が長母寺を建てたおかげで、この後のお話（無住国師の来往。尾張万歳、「沙石集」の編纂、そして狂言「附子」の誕生）が進んでいきました。

⑤ 金虎酒造

江戸後期（1845年）から続く、市内で数少ない酒蔵。名前は名古屋城の金鯱から。また、三代目の方が寅年だったからだそうです。昭和20年（1945年）に名古屋城と同時に蔵を焼失しており、現在、本丸御殿復元を願った吟醸酒「名古屋城本丸御殿」を造っています。

⑥ 木ヶ崎公園

小さなお子さんを連れた親御さんや、元気に走り回る子供達が賑やかな公園。公園付近は都市計画決定されているエリアのため、開発が制限されているようです。かつての矢田川の跡で、桜の名所としても知られています。

⑦ 長母寺

鎌倉時代（1179年）に、山田重忠が母を供養するために建てたお寺。夢で熱田明神からお告げがあったとのこと。その後、無住国師が移り住んで、仏法説話集の「沙石集」を編纂。「沙石集」には、狂言の曲目の1つ「附子(ぶす)」の原型になったお話もあります。また、村人たちに法華経をわかりやすく説くため、節を付けて教えたのが「尾張万歳（国の重要無形民俗文化財）」の始まりです。
お寺にある無住国師等身木像と、無住国師の墨蹟は愛知県の重要文化財。尾張万歳は、現在の名古屋市東区矢田町にある長母寺を開いた無住国師が、鎌倉時代の正応年間（1288～1293年）に作ったといわれています。彼は晩年、寺男の有助親子に教え、これを寺の領内に広めたという説が広く知られています。これが愛知県内各地に伝えられ、正月の祝福芸として庶民に親しまれてきました。特に知多半島では、明治以降、農閑期の出かせぎ万歳として盛んとなり、大府駅から東京方面への団体割引の万歳列車が出るほどでした。万歳の芸は、扇子を持って祝詞を唱える太夫と、鼓をたたいて合いの手を入れる才蔵とで演じるもので、基本は2人1組。太夫は芸に秀でた年上の者が務め、才蔵は長年務めて芸を覚えてから太夫になりました。演目によっては、太夫を中心に、左右に才蔵を2人・4人と加えたり、楽器も三味線や胡弓を加えて華やかな舞台芸とすることもあります。本堂、山門などは登録有形文化財に指定されています。

⑧ 矢田川河川敷から眺める中央本線の電車

江戸時代に庶民が往来した「下街道」の傍を、今は通勤、通学で多くの人達を運ぶ中央線の電車が走っています。かつて矢田川は長母寺の南を流れていました。

⑨ 白山社

境内の中は緑豊かな落ち着いた空間。ただ、境内には「支那事変記念」なる石柱があります。

「附子（ぶす）」とは？ 附子という猛毒が入っている桶に近づくなと使用人に言いおいて出掛けた主人。けれどそれが気になって仕方がない使用人は、主人が留守の間にこっそりのぞくと美味しそうなので食べてしまいました。実はそれは砂糖。使用人は主人に怒られないように、家のお宝を壊して泣いて主人の帰りを待ちました。帰ってきた主人に「掛け軸と茶碗を割ってしまったので死んでお詫びしようと附子を食べたが死ねない」と嘘をつきます。最後は主人が「やるまいぞやるまいぞ」と使用人を追いかけて、おしまい。

〈注意事項〉この地図は「歴史まち歩き」の資料として作成されました。まち歩きには、歩きやすい服装と靴でご参加ください。車などに十分注意し、各自で責任をもって行動してください。住宅地では住民のプライバシーに十分配慮して歩きましょう。●お問い合わせ：（公財）名古屋観光コンベンションビューロー　TEL 052-202-1143（この情報は平成26年11月現在のものです。）